

觀音靈驗

度を致して雷を覗がつて居る、ケレども、ナカク、油断と云ふものは、ないイツ捕手の人数が向つて来るか知れませんが、用心に用心して居る、デ雷太郎の大磯通ひといふのは、船で直ぐに大磯へ着ける事もあるし、七里ヶ濱へ揚つて陸を往く事もあるが、今此處で仇を討つには、観音九へ切り込むか、陸を大磯へ往く途中で討ち取るか、二ツ一ツの場合だ、ソコで何れも相談に及ぶと、大儀しは、寧ろ船へ切り込んで不意に彼等を討ち取つたほうか、宜からうと思ひます、折角敵さが眼の前に居ながら、猶豫して居ては、イツ何時帆を捲いて逃られて仕舞うか、知れたものじやアない……一日も早く本望と達したうございます、龜庵しも大之丞と全し考がへで、先方は船に居るんです、今夜にも出發されて仕舞やア夫れ迄だ、何處を如何尋ねるにも、ソコ一寸には解りません、之から直に乘込んで、雷太郎の首を討ち落し、亡文の位牌に手向けたうございます

敵討雷太郎

……チー、忠介さん、貴郎の考がへは如何なものぞ、をさいますしやう、忠介は暫らく黙然として考がへて居たが、忠成程、二人さんの仰しやるのは、誠に御無理のない話ですが、俺しは船へ切り込むといふのは、何も反つて味方の爲めに、不利益かと存じます、仇は船には、慣れて居ります、この此方は、船の事は、全然知りません、から進退懸引きといふものが、自由にならず、夫れに先方の危うき時、万一へ海へ飛び込まれて仕舞つたら如何して跡を追かけます、陸ならば、一生懸命に追かけると云ふ事が出来、ます、くれと海では、金程水線に達して居ないと、飛んだ不覺を取るやうな事が、出体し、ます、殊には、何時かや、観音へ、ね籠りを致したとき、主人、宗大夫、夫婦の亡霊が、夢枕に立ちましたとき、七里ヶ濱に於て、陀度本望を達せられると申されたが、今日迄の處では、全く夢知らせが、當つても居り、ます、ゆへ俺しは、七里ヶ濱の陸から、大磯へ通ふ處を待伏して



觀音靈顯

討ち取る方が宜からうと思ひますと、イツに背けなく辨舌酒々として述べ立ましたゆへ龜次郎並に大之丞も此理に服し首を垂れて考がへて居る此時權太左衛門は一同の者に向い權イヤ忠介さんお前の今のね話し實に理に附んだ甘い處へ氣が注いた全く夫れ位を要心して懸らなければ仇は武藝に優れたる劍道の名人迂濶な事をしたならば返つて夫れが爲めに飛んだ不覺を取るだらう就ては此處に一ツ俺しの考がへと云ふのは七里ヶ濱に居るアノ婆の茶屋……那處を當分借り受けて雷の通るのを待つと仕やうソ一して大之丞に龜次郎は大磯屋へ往つて居て雷の様子を探り此方へ知らせると云ふ事にしたら宜からう夫に此頃は風が始終吹くから七里ヶ濱の沖へ船を繋いであると云ふ事を俺は探り出したし総て七里ヶ濱から往けば賊とに津が好くつてソ一人にも怪しまれず廊へ這入るにも便利だからソ一大磯へ直着と

敵討雷太郎

いふ事はない之れ程要心して懸つたら遅かれ早かれ茲五六日の間には本望を達せられる事疑がひなきゆへア左様焦燥すに時節を待つたが宜からうと權太左衛門の爲に逸る心を賊しめられた權ソコで此店を明日から閉店して仕舞つて休業といふのも何んだか人目に立つて返つて怪しまれる甚ひだ之りやア寧ろの事武兵衛一人此處へ残り商賣は遣つて居て貰ひたい夫れに此頃来たアノ女中のね竹にも大概の事は解るからイヤと云へば直ぐに大之丞か龜次郎の内が迎ひに来て裏道通りから婆アの茶見世へ蒐け付けりやア間に合はない事はない俺と忠介とは今日から那の婆アの茶見世へ往つて居る……二人は決して扱りのないやうに仕なくては往かないと充分手筈を定め龜次郎大之丞の兩人は大磯屋へ登樓つて仇雷の様子を覗つて居る白玉にも克く頼んで置て内通を仕て貰つたから雷太郎はモハヤ袋の内風だス



觀音靈驗

と三日目の晩に例の通り忍び姿で一人の供を連れ阿波の大鹽  
と云ふ觸れ込でもつて登樓した…… 龜大之丞今夜は仇が登樓  
ました今白玉花魁の話しちやア今夜は風が強かつたから陸を來  
たと云ふ話しは確然此しやア端船を七里ヶ濱へ廻してあるに違  
ひない俺は之から武兵衛に知らして先へ婆アの茶屋へ往つて居  
るやうに知らして來まじやう 大成程今日は風が強いし夫に此  
頭は觀音丸も七里ヶ濱の沖へ懸いてあるから屹度歸りは陸を往  
つて端船に乗るに定つて居る夫しやア御苦勞乍ら一寸知らして  
來て貰はう之から龜次郎は武兵衛に此事を告げ一足先さへ婆ア  
の茶屋へ往つて綾瀬ののにと今夜の事を知らせ支度と致して居  
るやうにと申し聞け再たび大磯屋へ取つて返へし様子を覗がう  
と白玉も羨俠心のある花魁と見ね是非龜次郎大之丞の兩人に首  
尾克く仇を討たして遣りたいと思ふので其晩充分酒を侷り酌酌

敵討雷太郎

いたさせましたケレども疵持つ足の雷太郎幾ら酔つても本望違  
はず時刻が來ればチャーンと歸る一大サア愈々今日は時節到來  
七里ヶ濱へと歸るから裏道通りを先さへ抜けて婆アの茶屋で待  
合はせやうと天にも登る悦びをなし二人の者は一散走り大磯  
屋を出て近道と急ぎ婆アの茶屋へ往つて權太左衛門始め忠介武  
兵衛にも此事を話す 權イヤモ一此方の支度は充分出來てる大  
龜私し共も上衣さへ脱げば宜しいので…… 此處で一同支度も出  
來今や來ると男み立ち乃の目釘を濕して待つて居る雷太郎は斯  
くとも知らず宵の宿夢の未だ醒め遣らず朝風に面を吹かれイト  
快よげの婆の茶屋の前へとさし懸るとバラ／＼と四五人の者が  
躍り出た豫てより用心して居る事故屹度身掛へに及ぶと四人の  
者は聲を振り立て四人ヤア珍らしや雷太郎汝の爲めに大勢の者  
を討たれたる高野大之丞同弟龜次郎並に家來武兵衛川合宗太夫



觀音靈驗

の 小者忠介年來の遺恨を晴さん爲め此の處に待受けたりサア尋  
常に勝負いたせ……と呼ばれば權太左衛門も動搖出で怒れる眼  
に血を注ぎ大音に言ひける 權如何に雷太郎吾が肉身の弟銅  
八先の年熊ヶ谷堤にて討たれたる事確かに聞及べり故に今日四  
人の者の助太刀を致すも弟の仇と思へばなりイザく尋常に勝  
負せよツと猛虎の怒れるが如き有様にて呼ばれば雷太郎も胸に  
ギツクリ扱は捕手の人数と思ひしに敵討とはものくしと思ひ  
置ヤア手前等にツウ跡を附られちやア枕を高く寐事も出来ぬへ  
寧ろ一思ひに返り討ちにして呉れる逃げも隠れもしねいから下  
ギマギマせすと勝負しろと忽ち身支度に及び磐若九の一刀を抜  
き翻し寄らば切らんと上段に振りかぶりました權太左衛門は傍  
へにありて勝負如何と見物なす四人の者は白刃を抜き逆れ切り  
付くるを事ともせず一上一下虚々實々受けつ流しつ闘かへば

敵討雷太郎

四人の者は心矢竹に逸れども未だ夫れ程の武術に達せず劔ら  
者は龜次郎大之丞の兩人なれば次第く雷の刃に切り立てら  
れ危うくこそは相見ぬたり此時沖の方よりして櫓を押し切り此  
方を指して上陸せしは雷太郎の供の者より婆の茶屋にて斯々の  
次第と觀音丸へ注進したと相見ぬ無理太郎並びに仇浪の黒造小  
陶の磯右衛門の三人雷に助太刀せんものどて來たりしなり權太  
左衛門之を見るより行手に立塞がり邪魔する奴原撫斬りにせん  
ものど三人を喰ひ止め茲を先途と戦かひけり劔術手練の權太左  
衛門は狼の吠ゆるが如く喚き叫んで斬り立つる何かは以つて堪  
るべき仇浪は其場へ車切り小陶は竹割と四ツになつて死たりけ  
り残るは一人隼卒と字を取つた無理太郎……此れはナカくの  
手利きでございますから手傷に屈せず電光石火と切り結べど剛  
勇なる權太左衛門に何條及ぶ所あらん打下す太刀を受け損じ耳



觀音靈驗

の傍りより額へかけ斜傾にスツバと切り下げられ首は大地へ落  
ちました榎太左衛門は懸て身を翻がへし榎助太刀の奴原は打  
留めたり四人の者心を願まし闘かへど力を付けて遣りました  
ナニシロ忠介武兵衛の兩人は所々に手疵を受けたる事とて進退  
自由ならず肝心な龜次郎大之丞の兩人も多少手疵を受け一人の  
雷太郎に切り捲られたから榎太左衛門は大きに心配致し用意の  
手裏劔を手に取上げヤツと聲を懸け討込んだ處誤またず雷の眉  
間へグザと立ちました雷アツ……といつて手裏劔を抜こうと  
する處を大之丞透さず肩先さへ切り込むと龜次郎は踏込んで再  
た以肩間へ切り付けたり流石の雷太郎なれど眼に血乗りて太刀  
筋乱れ盲打に働らきて四人の者に渡り合ひしが終に其場に翻と  
倒れしを倒れも立寄り胎の如くに切さいなみ首を其儘打落し今  
月今日年來の本望達したりアヲ嬉しや喜こばしやと願見合せて

敵討雷太郎

ニツコリ笑ひ雷太郎並びに無理太郎の首は位牌に備へ一同之に  
て年來の本懐を遂げましたが偏へに之れ榎太左衛門の骨折で  
さいます五人の者は仇討並びに助太刀の次第を代官所へ訴たへ  
出で領主より敵討免許状まで拜領してある事を述べたから別に  
ね咎めはなく返つて一同の働らきを褒められたソコで一と先づ  
紀州屋へ立歸りモハヤ此地に用も無ければとて以前より世話に  
なりし上州屋へも暇乞ひし雇人にも暇を出し店を畳んで故郷へ  
立歸りましたが大磯屋の小磯万代は後に大之丞並びに龜次郎よ  
り身の代金を出して身受けに及び白玉も共々身受けを致した  
如何にも優しき心ばへの女故榎太左衛門の周旋にて忠介と嫁合  
せる事になり武兵衛は主人文右衛門の菩提を吊らふ爲めに髪を  
卸して出家致し又忠介は宗太夫の跡目をば相當の者を撰び相繼  
させて大旋餓鬼を施行し己れは兼て兄弟の約束も致した事であ



二百八  
るから熊ヶ谷在へ引き移り萬屋近くへ一家を持ち替夫々安樂  
に世を送つたといふ敵討の講談も是にて大尾と相成り交した  
永々御退屈さま………



敵討雷太郎

明治三十三年二月五日印刷  
明治三十三年二月十七日發行

仇討  
雷太郎

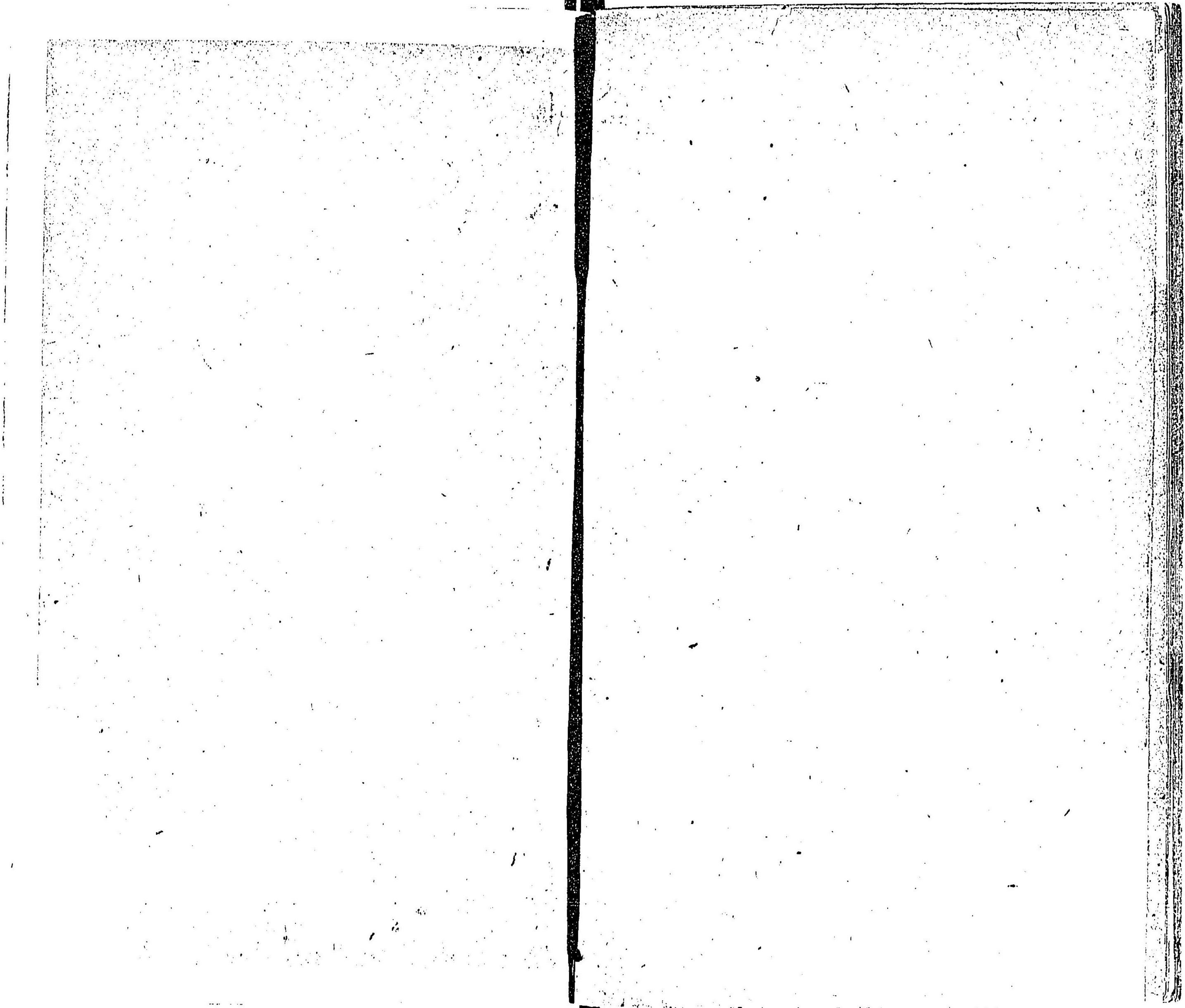
編輯兼 發行者 菅谷興吉  
東京市淺草區須賀町十八番地

印刷者 大島寛治  
東京市神田區表神保町十番地

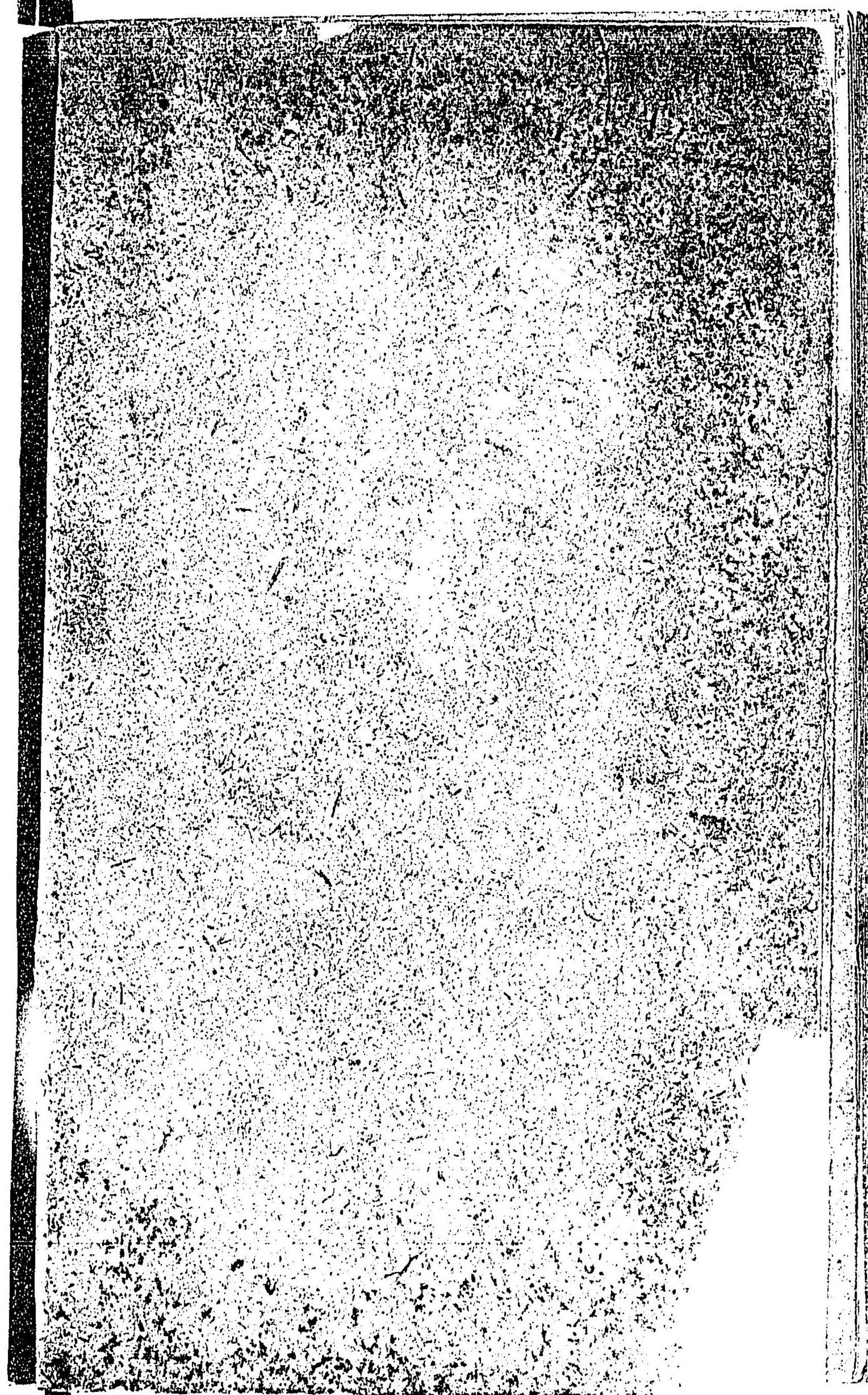
印刷所 大島活版所  
東京市淺草區須賀町十八番地

發行所 日吉堂

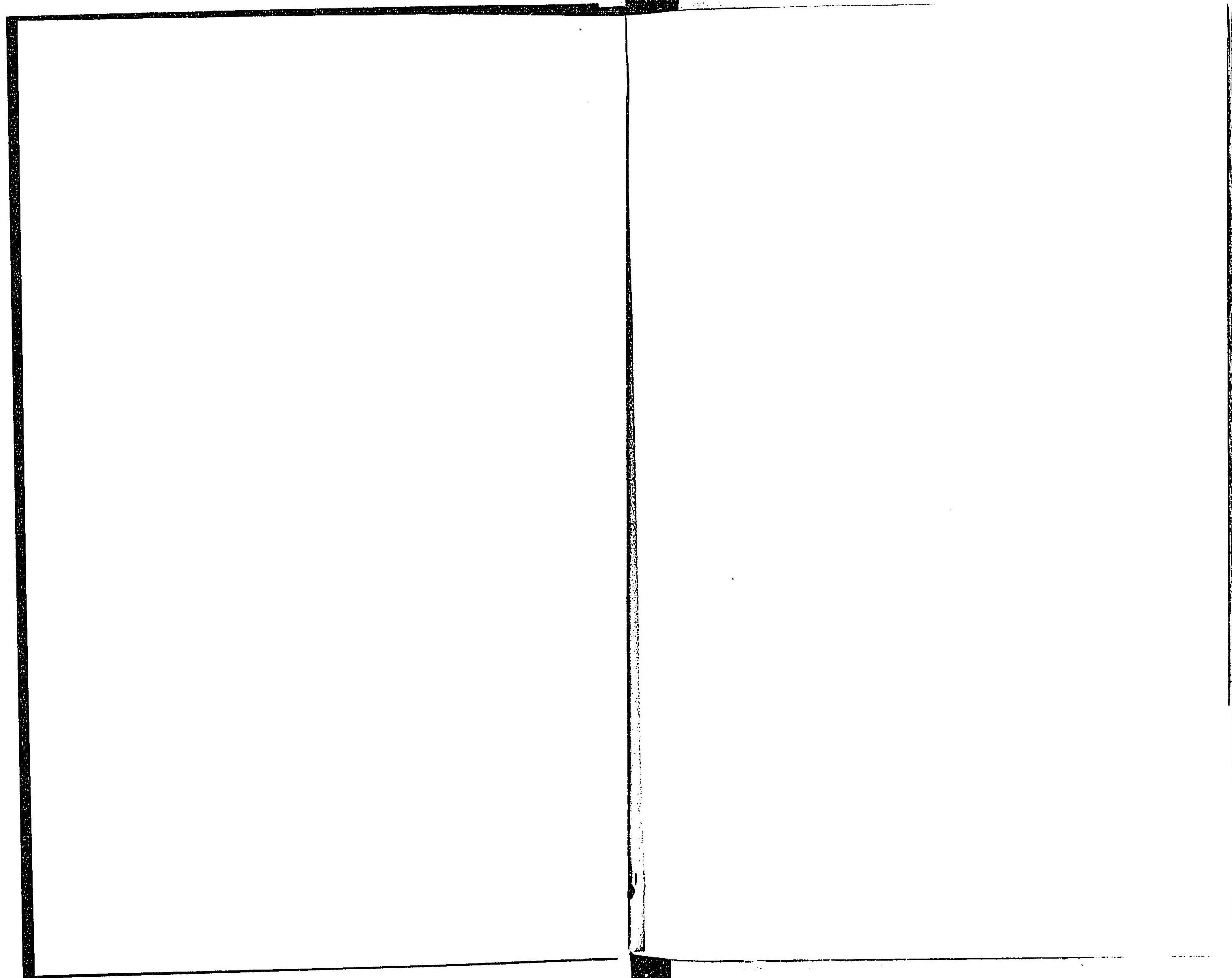




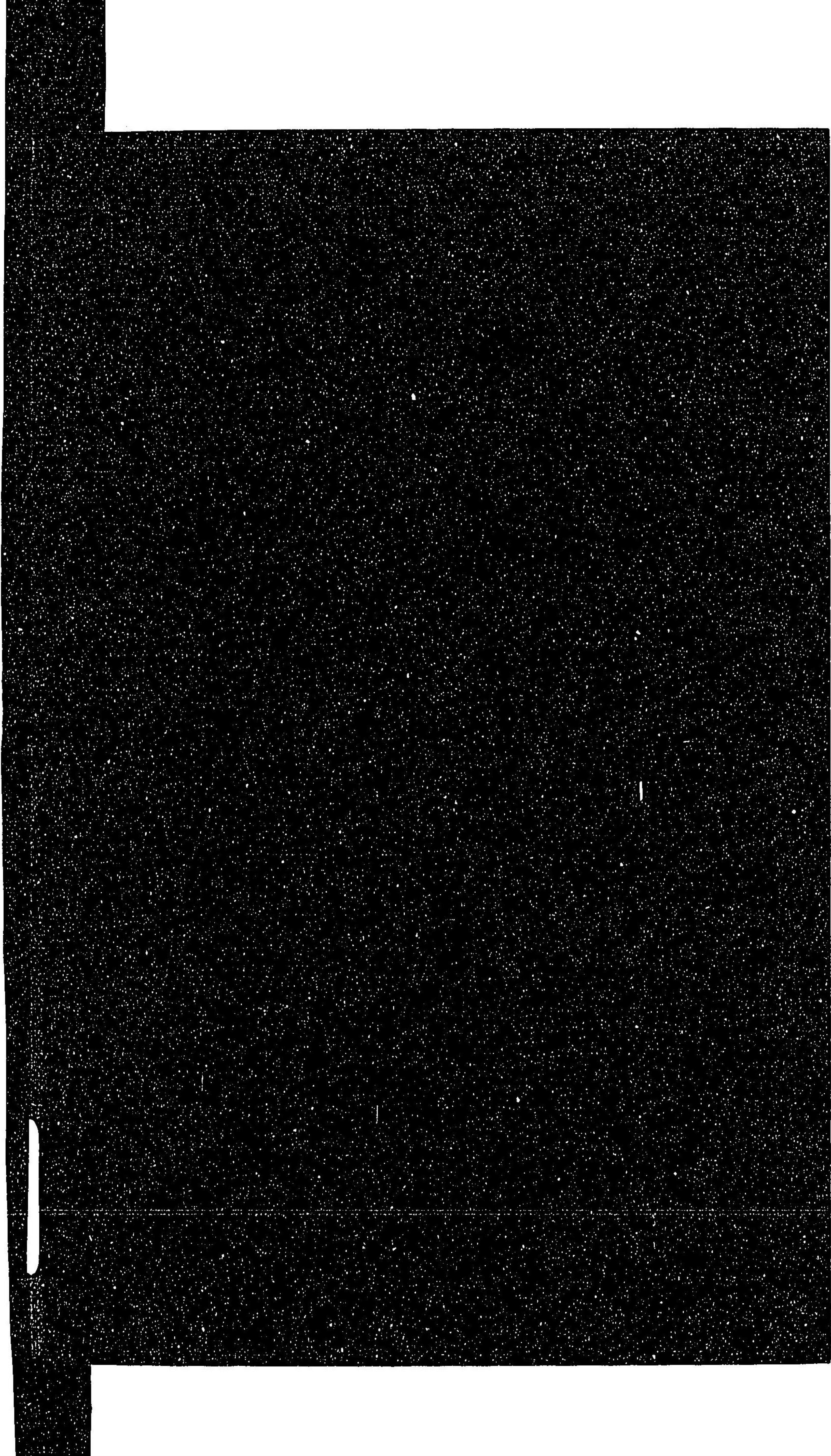














特 8  
271

205012-000-1

特8-271

復讐雷太郎

神田 伯林 / 講演

M33

EDV-0003





